

明石城(喜春城, 錦江城) (国の重要文化財, 国の史跡, 百名城)

(明石市明石公園) (明石公園)

明石城（あかしじょう）は日本の城。所在地は兵庫県明石市明石公園。旧明石藩の政庁と藩主の居所が置かれた。別名、喜春城（きはるじょう、きしゅん-）、錦江城（きんこうじょう）とも呼ばれる。

概要

JR 明石駅北側に位置し、駅ホームより間近に望める。縄張りは連郭梯郭混合式の平山城である。丘陵舌端に築かれ、本丸付近は柿本人麻呂を祀った人丸塚があったと言われており、この地は嘉吉の乱で激戦地となった。

明石の地は、山陽道が通り、北には丹波国、但馬国への道が分かれ、淡路島、四国のルートがあり、古来より交通の要衝であった。徳川幕府が西国の外様大名の抑えの城として、姫路城について着目した。

現在中堀の内側は兵庫県立明石公園として整備され、日本さくら名所 100 選に指定されている。櫓や石垣は 1995 年（平成 7 年）の阪神・淡路大震災で被害を受けたが全面修復された。

沿革

江戸時代

1617 年（元和 3 年）信州松本城主より明石藩主となった小笠原忠真は、明石城の西方、明石川河口西岸にあった船上城に入城した。譜代大名たる小笠原氏 10 万石の居城として城郭を建設するよう、同年に 2 代将軍徳川秀忠より築城命令された。この時の様子を『本田家記』によると、

元和六年午の春明石ニ新城を築可申旨、上意ニ而本多美濃守殿右近様御相談、地形見立言上可被成との儀ニ而美濃守明石へ両度御方々御見分塩見分塩屋与申处浜ニ少し入江有之ニ一所、亦明石より西かまか坂与申处高き岡あるに一处、又明石人丸山ニ一所御見立有之、御相談之上人丸山ニ極り

－ 本田家記（小笠原文庫蔵）

と記されている。この文中にある「元和六年」とは「元和四年」の誤記ではないかと思われ、「本多美濃守殿」とは当時姫路城の城主であった本多忠政の事である。この『本田家記』によると、徳川秀忠より築城命令があり、本多忠政と小笠原忠真は相談しながら（忠政は忠真の義父にあたる）、築城から町割りまで行った。当初検討された地は三ヵ所、塩屋町（現在の神戸市垂水区塩屋町周辺）、かにが坂（現在の明石市和坂周辺）と人丸山（赤松山）が検討されたが、人丸山には大きな池があり城の防備に役立つとして人丸山に定まった。徳川秀忠は旗本の都築為正、村上吉正、普請奉行として建部政長らを派遣し、築城費として銀一千貫を支給した。

人丸山の地の利を利用し、三木城、高砂城、枝吉城、船上城の木材を使用し着工され、坤櫓は伏見城、巽櫓は船上城の遺材が使用されたと伝えられている。元和 5 年（1619 年）正月から作事が始まり、元和 6 年（1620 年）正月には小笠原忠真が船上城から移り住み、同年 6 月から城内の建物関係の工事が開始された。このとき天守は台石まで積まれたが、建てられなかった。

築城と並行して城下町の町割りも実施され、当時小笠原忠真の客分だった宮本武蔵が指導したと『播州明石記録』『小笠原忠真一代覚書』にも記載があるが、『ひょうごの城紀行』によると「はっきりしない」としており宮本武蔵説を肯定しない記述となっている。

歴代城主

苦心して明石城を築城した小笠原忠真は、1632 年（寛永 9 年）豊前国小倉藩（小倉城）に転封となった。翌 1633 年（寛永 10 年）信濃国松本城より 松平康直（戸田氏）が 7 万石で入城したが、急死したため松平光重が城主となった。しかしその松平光重も 1639 年（寛永 16 年）が美濃国加納藩（加納城）に転封とな

ると、大久保忠職が7万石で入城したが、1649年（慶安2年）のわずか10年間で肥前国唐津藩（唐津城）に転封する。

その後、丹波国篠山城より松平忠国が7万石で入城、その子松平信之と共に名君として知られ、林崎掘割の用水路や一里塚の設置、海岸の防風林の造成、そして多くの新田の開発に努めた。文化人でもあったらしく城内十景を選んでこの時に「喜春城」の名を付けた。しかしその松平信之も、1679年（延宝7年）大和国郡山藩（郡山城（大和国））に転封となると、代わりに郡山城にいた本多政利が6万石で入城する。しかし、領内を収める事ができず1682年（天和2年）僅か3年後、苛政を責められ陸奥国岩瀬藩に1万石に減知転封となり、その後改易になった。僅か50年の間に城主が目まぐるしく入れ替わったが、本多氏転封の後、越前家の松平直明が6万石で入城し、以後明治維新まで10代、189年間親藩として松平氏の居城となった。各城の遺材を集めて築城したせいか、老朽化が早く2代藩主松平直常の1739年（元文4年）には大修築が行われた。最後の明石城主は松平直致で、1874年（明治7年）廃城令により廃城となる。

城郭

本丸を中心に配し、東側に二の丸、その東に東の丸が配され、南側に三の丸、西側には稻荷郭が設けられた。本丸、二の丸、東の丸は明石城の主郭部分で、この部分の石垣、土塁、堀などの作事は徳川幕府が担当し、三の丸と町屋に関しては、小笠原氏と徳川幕府の共同事業として進められた。

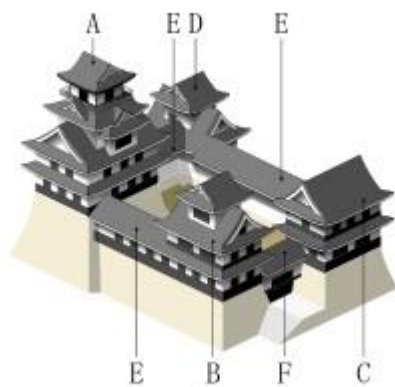
櫓と門

- 櫓合計：20基
- 門合計：27棟

本丸の西南に天守台の広さは約152坪がある。広さから推察すると5重の天守が築かれる予定だったが、天守は建設されず、四隅に巽櫓、坤櫓、乾櫓、艮櫓が建設された。『日本城郭大系』によると「坤櫓が天守閣の代用となっている」としている。4基のうち南側の2棟、すなわち巽櫓（たつみやぐら、南東側）、坤櫓（ひつじさるやぐら、南西側）が現存し国の重要文化財に指定されている。巽櫓・坤櫓の棟（破風）の方向は異なっている。西側は明石川を自然の外堀とし、南側は運河を掘って港を兼ねた外堀（現在の明石港）とした。北側は鴻の池（剛の池）と自然林、谷筋で防備を固めた。

藩主の居館は本丸にあり3階建ての立派な建物で、部屋には名前や画風から長谷川等伯の弟子と考えられる長谷川等仁の手になる、襖絵「花鳥山水図」が飾られていた。現存するのは、晩冬から春の前兆を描いた二曲屏風六隻・全12面だが、本来は夏から秋にかけての花鳥山水図が対で存在し、四季花鳥図を構成していたものと推定される。この居館は1631年（寛永8年）に失火し焼失してしまったが、襖絵の一部は遺物として残り、大坂の蔵屋敷に運び出されて幕末まで伝えられた。この時までは六曲一双の屏風絵だったが、明治になって12幅の掛軸に^[1]、さらに現状と同じように改装された。その後、1959年（昭和34年）に右から2番目から4番目に当たる三隻が売りに出され、2,3番目はアメリカ人、4番目はフランス人外交官の手に渡った。その3年後フリーア美術館が残り三隻[1][2][3]を入手した。1996年（平成8年）サザビーズにアメリカ人から電話があり、これを受けてサザビーズがフランスにある物も突き止めて、三隻揃ってオークションにかけられた。これが日本人コレクターに競り落とされて里帰りし、現在は愛媛県美術館に寄託されている

Wikipediaによる



天守は無いが本丸の四隅に三重櫓 4 基が設けられていた

